様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２６８８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ０３２９６

研究課題名（和文）心理アセスメントにおけるフィードバックの実践的モデルと研修プログラムの開発

研究課題名（英文）Developing a practical model and training programme for feedback in psychological assessment.

研究代表者
熊上　崇（Kumagami, Takashi）

和光大学・現代人間学部・教授

研究者番号：４０７１２０６３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：心理職は心理検査の検査結果を被検査者や支援者に、どのようにフィードバックをするか、どのようなフィードバック書面を作成し、面接を行い、チーム支援に結びつけるかの包括的な研修プログラムを作成し、実施した。フィードバック研修プログラムは、フィードバックの理念と技法から成る。理念については、フィードバックを行うことは検査者の義務であり、被検査者の権利であり、支援につながること。技法については、知能検査の結果報告書面の作成方法、フィードバック面接技法、そしてチーム支援会議での報告方法、事例集から成るテキストを作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
心理検査、特にWISC-ⅤやKABC-Ⅱなどの知能検査を、学習面や行動面で困難を有する子どもへの支援に活かすためには、公認心理師などの検査者がフィードバックの理念と技法（スキル）を身につけ実践することが必要である。しかし、フィードバックに関しては体系的な研修プログラムがない。公認心理師など心理検査を実施する心理職は、心理検査の実施、採点、解釈、支援方法の策定だけでなく、被検査者の自己理解を促し、支援への意欲が高まり、チーム支援体制構築に寄与できる研修プログラムの作成は検査を受ける子どもにとって必要であり、社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：A comprehensive training programme was developed and implemented for psychologists on how to give feedback on psychological test results to the test subjects and their supporters, how to prepare written feedback, conduct interviews and link this to team support. The feedback training programme consisted of feedback principles and techniques. Regarding the philosophy, providing feedback is the duty of the examiner and the right of the examined person to be supported. For the techniques, a text was developed consisting of how to prepare a written report of intelligence test results, feedback interview techniques, and how to report in team support meetings, and a collection of case studies.

研究分野：臨床心理学

キーワード：心理検査　フィードバック　アセスメント

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

文部科学省の調査（2011）では、通常学級に在籍する小中学生のうち、学習面または行動面に困難を有する生徒は 6.5%、学習面に困難を有する生徒が 4.5%と報告されており、発達障害や知的障害の傾向のある子どもへの支援が求められている。また、知的発達面の遅れや困難を指摘されて、児童相談所や教育相談所においてウエクスラー知能検査や KABC-Ⅱなどの知能検査をとるケースもある。しかしながら、子どもに多くの負担をかけて知能検査を実施した後に、被検査者や家族、支援者に対して、結果の説明や支援体制方法についての十分なフィードバックは行われているのであろうか？

熊上（2016）は、知能検査の検査者 66 人に調査を行い、被検査者が小学生の場合は23%、中高生を含む場合は72%がフィードバック面接を実施していると報告している。一方で、フィードバックを受ける側の保護者は、熊上ら（2022）による大阪 LD 親の会の会員への調査によると、知能検査のフィードバックについて、口頭での報告で内容が理解できなかったり、数値を聞いてもその意味するところが分からないために、検査を受けた意義が認められないケースも見られている。

WISC-Ⅴや KABC-Ⅱなどの知能検査を、学習面や行動面で困難を有する子どもへの支援に活かすためには、公認心理師などの検査者がフィードバックの理念と技法（スキル）を身につけ実践することが必要である。しかし、国内外の実情を見ても、フィードバックを学ぶ機会は乏しく、各心理職の現場での研鑽やスーパーヴァイズに委ねられており、知能検査に関しては体系的な研修プログラムがない。公認心理師など心理検査を実施する心理職は、心理検査の実施、採点、解釈、支援方法の策定だけでなく、チーム支援体制構築に寄与できる研修プログラムが望まれている。そのために、誰のため、何のためにフィードバックを行うのかという倫理・理念、被検査者や支援者に対してどのようなフィードバック書面を作成し、フィードバック面接を行うのか、チーム支援会議へのフィードバックも含めた研修プログラムの開発が望まれている。

２．研究の目的

知能検査のフィードバックに関する研修プログラムを作成し、試行することが本研究の目的である。フィードバック研修プログラムは、フィードバックの理念と技法から成る。理念については、フィードバックを行うことは検査者の義務であり、被検査者の権利であり、支援につながることが重要である。技法については、知能検査の結果報告書面の作成方法、フィードバック面接技法から成る。

検査者の心理検査のフィードバックのトレーニング状況について、依田（2015）は臨床心理士養成大学院の大学院生を対象とした調査で、知能検査のフィードバックのトレーニングは９つの大学院のうち５カ所で行われているが、「大学院生はフィードバックに関する訓練がまったく足りていないと感じている」という結果を報告している。確かに筆者自身も、知能検査の講習会等に参加すると、検査の背景となる理論、実施法、採点、解釈、支援法については学ぶプログラムはあるが、それをどのように被検査者や支援者にフィードバックするかのプログラムはこれまで体験することはなかった。

フィードバックに関する海外の研究をみると、MMPI やロールシャッハテストについ

ては、Finn (2007) が、「治療的アセスメント」「協働的アセスメント」を提唱しており、被検査者と検査者が協働してアセスメントとフィードバックのセッションを行うという実践があるが、アメリカ心理学会（APA）メンバー513 人を対象とした Cury&Hanson（2010）によると、フィードバックのトレーニングについて体系的なものはなく、各自の「自己学習」「トライアンドエラー」により、各勤務先でのトレーニングが主であると報告されている。また Jacobson ら（2015）はカナダのサイコロジスト 399 人を対象とした調査において、フィードバックのトレーニングは指導者との討論やスーパーヴァイザーによるモデリング、ロールプレイなど臨床場面での訓練が主であると報告しており、国内外において、フィードバックの体系的なトレーニングは十分でないと推察される。

実際、筆者が見たあるフィードバック場面は、検査者が一方的に検査の数値や理論を説明し、被検査者と家族が困惑した表情をしていた。また、筆者が 30 人の公立高校生に KABC-Ⅱを実施した際に、その結果を生徒に分かりやすく、視覚的な図を用いて、平易に説明した「アドバイスシート」を作成してフィードバックを行った際には、高校生たちが、喜んで自分の認知特性を話し合っていたのが印象的であった（熊上ら、2015）。そこで、フィードバックについて、心理職を目指し心理アセスメントを学ぶ大学生や大学院生がその理念と技術を身につけるための研修プログラムを作成することが本研究の目的である。

３．研究の方法

本研究では、まず心理検査のフィードバックについて、受け取り側である被検査者（子ども）の親のインタビューを行った。ＬＤ親の会へのインタビューを通じて、どのようなフィードバックが望ましいのかを探索的に検討した。

次に、被検査者（子ども）や保護者、支援者らに対して、被検査者の特性を分かりやすく説明し、支援体制の構築を行っている好事例を収集した。

これらを踏まえて、心理検査を実施する心理職が使用できるフィードバック書面とフィードバック面接のモデルを作成し、どのような構成でフィードバック書面とフィードバック面接を行うか、試案を作成した。特にフィードバック面接を身につけるために、ロールプレイを行うための台本を作成した。

この試案をもとに、心理職に対するフィードバック研修プログラムを作成し、試行した。心理検査の初学者に対して、模擬事例を用いて第 1 回目のフィードバック書面を作成してもらい、フィードバック面接および拡大ケース会議を実施した。第 1 回目のフィードバック試行について、改善点を心理検査を学ぶメンバーで議論し、第 2 回目の書面を作成を行った。これらの実践をもとに、心理検査のフィードバックの研修プログラムを開発し、書籍としてとりまとめた（熊上、熊谷、熊上、2022）

フィードバック研修プログラムで使用する模擬事例と試行例は以下の通りである。フィードバック研修プログラムは 4 コマ（一コマ 90 分程度）から成っている。

1 コマ目は、フィードバックの理念と目的について学ぶ、2 コマ目は、知能検査の結果報告書の書き方を学び、その作成演習の第 1 回目を行う。3 コマ目は、作成した報告

書を受講生相互で検討し、良い点、改善点を出し合い、その結果を踏まえて第２回目の作成演習を行う。４コマ目は、第２回目で作成した知能検査結果報告書を用いて、検査結果を、子ども・保護者、支援者が集うチーム支援会議でどのようにフィードバックをするか、モデリングとロールプレイを用いて演習を行い、その結果についてシェアリング（振り返り）を行うものである。

１コマ目の、フィードバックの理念については、Pope（1992）の心理検査のフィードバックが検査者の倫理であること、Finn（2007）による協働的アセスメントにより、心理検査の結果を一方的に検査者が伝達するのではなく、被検査者と共に作り上げていくという理念について学んだ。

そしてAPA,特別支援教育士などの倫理規範（水野、2006）に基づき，フィードバックは「誰に，何のために，どのように」行うか，について習得した。

さらに保護者がどのようにフィードバックを受けとめるかを講義する。特に，フィードバックを受けるにあたって，保護者には期待だけでなく不安や混乱などネガティブな感情が生起すること，そのために書面や面接が充実していれば，学校などとの情報共有がうまくいき，支援につながることを強調した。

２コマ目のフィードバックの書面（報告書）の作成演習では、模擬ケース（和光太郎さん）を用いて，報告書を作成した。

その際に、知能検査の結果（全検査IQや各群指数）を分かりやすく視覚的グラフなどを用いて伝えること、知能検査のフィードバック書面に書かれている専門用語（IQ,信頼区間、各群指数）について、どのように被検査者（子どもを含む）や保護者，支援者に書面で伝えるかを学んだ。

３コマ目　フィードバック面接演習

フィードバック面接演習に入る前に、フィードバック面接手順表（熊上、2017）を用いて、どのような説明の仕方だと被検査者や保護者、支援者に理解しやすく、また特性が理解できて支援につながるかを討議した。なお、フィードバック面接においても，通常のカウンセリング面接技法と同様に，検査者２割，クライエントに８割話してもらうことを意識するように指導した。

そして、フィードバック面接のロールプレイを行った。その際に、モデリング（指導者が手本を示す)、ロールプレイ（台本を用いて良い例と悪い例を行う、その後で、自分なりに演じる)、シェアリング（まず良い面を指摘し、その後で改善点や、被検査者にとって望ましいフィードバックについて話し合う）の順で行った。

以上のように、心理職や保護者への調査も踏まえて、実践例をもとに心理検査のフィードバック研修プログラムを開発した。

４．研究成果

研究成果として、心理職向けのテキスト（熊上、星井、熊谷「心理検査のフィードバック」(2022,図書文化）を刊行した。

また、保護者向けに、心理検査特に知能検査について分かりやすく解説し、支援に活用する書籍（熊上、星井、熊谷「知能検査の〜〜」2020, 合同出版）を刊行した。

本書は特に心理検査のフィードバックを学ぶ機会のなかった児童相談所の心理職などの研修で活用されたり、研究代表者が研修講師として出講する機会が多くあった。研修を受講した心理職や管理職は、本研修プログラムをもとに子どもや保護者、学校など支援チームへのフィードバックをさらに被検査者の特性に配慮して書面や面接を行うことができるようになったとのことである。これらの定量的な効果検証については今後の検討課題である。

知能検査を受ける子どもは、学習面や生活面で困難を抱えている場合が多い。そのため、家族や支援者から知能検査（発達検査）の受検を勧められると、不安な状態で受検することもしばしばある。また知能検査は 1〜2 時間かかることが多く、被検査者にとっては緊張する新奇場面でもあり、知能検査を受けること自体が被検査者にとって心理的負担の大きいことである。さらに、その結果を検査者から伝えられる場面は、大変な心理的緊張があるのであり、検査者はそうした被検査者や保護者の心情に十分に配慮することが必要となる。

今回の試行実践では、フィードバックの理念や倫理を踏まえたうえで、フィードバックは被検査者の権利であること、その権利を保障するための技術を身につけるためのフィードバック研修プログラムの実施例を紹介した。その効果については、まだ一般化できるものではなく今後の研究課題であるが、今回の試行によって、フィードバックの理念や論理、書面作成技術の向上、チーム支援会議におけるフィードバック面接の方法の基礎を身につけることで、今後の更なる現場での応用に期待できるものと感じられた。

近年では、心理職によるフィードバックへの関心が高くなっている。また、現職者による心理検査のフィードバックの実践論文もいくつか見られる。星川（2022）は中学生で学力面や行動面で困難を抱える発達障害傾向のある事例において、KABC-Ⅱを実施し、中学生に分かりやすいアドバイスシートを用いてフィードバック面接を校内のチーム支援会議で実施した事例を紹介している。これにより、学校の教員間で検査を受けた中学生への理解が進み、中学生の自己の特徴が教員に理解されることで意欲が高まった事例を報告している。

子どもにとって、知能検査を「受けて良かった」「受けたことで元気が出た」と思えるようなフィードバックを行えるように研鑽をすることが、現職者やこれからの公認心理師などを目指す学生に求められる。そして、学習面や行動面で困難を抱える子ども達およびその保護者、支援者の支援体制の構築するために、フィードバックの理念と技術を身につけるプログラムを実施することが心理職の養成や現職者への研修でも求められよう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 熊上崇	４．巻 60
２．論文標題 少年非行から見る子どもと家庭ー困難を有する子どもへの理解と支援	５．発行年 2021年
３．雑誌名 立教大学教育学科研究年報	６．最初と最後の頁 33-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 熊上崇	４．巻 139
２．論文標題 母親に精神障害があり大学進学に不安を抱えている高校生	５．発行年 2021年
３．雑誌名 人権のひろば	６．最初と最後の頁 28-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 熊上崇	４．巻 806
２．論文標題 経済的に苦しい高校生への支援～ユースソーシャルワーカーと共に～	５．発行年 2021年
３．雑誌名 戸籍時報	６．最初と最後の頁 318-320
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 熊上崇	４．巻 13
２．論文標題 司法領域の心理アセスメントのフィードバック-日本犯罪心理学会会員へのアンケート調査から-	５．発行年 2020年
３．雑誌名 和光大学現代人間学部紀要	６．最初と最後の頁 21-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 熊上崇，熊上藤子，熊谷恵子	4．巻 21
2．論文標題 心理検査のフィードバックを保護者はどのように受けとめているかー親の会へのインタビュー調査の分析ー	5．発行年 2019年
3．雑誌名 K-ABCアセスメント研究	6．最初と最後の頁 25-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 熊上崇	4．巻 16
2．論文標題 知能検査のフィードバック研修プログラムの実践	5．発行年 2023年
3．雑誌名 和光大学現代人間学部紀要	6．最初と最後の頁 7-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 熊上崇、星井純子、熊上藤子、熊谷恵子
2．発表標題 知能検査のフィードバックに関する理論と実践
3．学会等名 第30回日本LD学会
4．発表年 2021年

1．発表者名 熊上崇，星井純子，後藤勝弘，奥脇学，熊上藤子
2．発表標題 心理検査の結果をどのようにフィードバックするか　－専門家・学校教諭・親の会の立場から－
3．学会等名 日本LD学会
4．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

1．著者名 熊上崇、星井純子、熊上藤子、藤田和弘、熊谷恵子	4．発行年 2022年
2．出版社 図書文化	5．総ページ数 207
3．書名 心理検査のフィードバック	

1．著者名 熊上崇、星井純子、熊上藤子	4．発行年 2020年
2．出版社 合同出版	5．総ページ数 96
3．書名 子どもの心理検査・知能検査 保護者と先生のための100%活用ブック	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関